SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

プンクトゥムとしての文学：パトリック・モディアノの方法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008204

プンクトゥムとしての文学
―パトリック・モディアノの方法

安　永　　愛

はじめに

2014年の秋、パトリック・モディアノ（Patrick Modiano, 1945～）のノーベル文学賞受賞は、大きな驚きをもって迎えられた。受賞者占いのオッズの上位者に、村上春樹やフィリップ・ロスとともにモディアノの名が挙げられている事実を、翻訳に関わった一人として筆者も前年から耳にしてはいたが、モディアノのミニマルなスタイル、その「マイナー・ポエットの慎ましさ」[1]は、燕尾服を着用した受賞者が荘厳なる舞台でファンファーレと共にメダルを手渡されるという究極のオフィシャルな賞のイメージにはどうにも重ならないように思われ、モディアノの文学賞受賞の可能性を現実的なこととして捉えてはいなかった。2008年にフランス作家ル・クレジオが同賞を受賞していただけに、それほど時を空けずして、フランス人作家が受賞するという事態は考え難いことだった。意外だったのはモディアノ本人にとっても同様で、散歩中に携帯電話で報せを受け、そのままガリマール社[2]に赴き緊急会見を行うことになったモディアノは、《C’est bizarre.》（奇妙なことだ）との口癖を発し、取材に集まった記者たちに「受賞の理由を知りたい」と率直に尋ねたという。

「モディアノ中毒」という表現があるとおり、たしかにモディアノの作品には、いつまでも浸っていたくなるような、読み終えた後も何度も反芻したくなるような独特な何かがある。しかし、それはあまりにささやかな、とりとめもない、およそ知的、文化的な論理には回収されないような微細な感覚に関係することであり、他者に向けて、あるいは論文のような形で麗々しく言語化することがためらわれるような何かであると、筆者は感じてきた。

---

[1] 野崎歓「星から届く光」『ふらんす』１月号、白水社、2015年、12頁。
[2] パリの老舗文芸出版社。モディアノはガリマール社より著作の多くを上梓している。

スウェーデン・アカデミーは「最も捉えがたい人間の運命を喚起し、ドイツ占領下の日常生活を明らかにした記憶の巧みな芸術」[3]をモディアノの授賞理由としている。スウェーデン・アカデミーには、モディアノのデビュー作から40年以上にわたり読み継いできたという審査委員もいるという。審査の内情について多少の情報にあたってみれば、モディアノの受賞はサプライズ受賞であるどころか、むしろ満を持しての受賞であったことが了解される。日本では売れない作家とされてきたモディアノであるが、ゴンクール賞、アカデミー・フランセーズ大賞、フランス文芸大賞、オーストリア国家大賞を授与されるなど、すでに授与される賞が残っていないと揶揄されるほどに、モディアノの文業は高く評価されてきたのである。

ノーベル文学賞授賞式に先立ってモディアノは12月７日にスウェーデン・アカデミーにて記念講演を行った。新作が刊行されるたびに、雑誌や新聞のインタビューに答えたりはするものの、自作や自らの文業について声高に語ることは少なく、テレビの書評番組に招かれれば、しどろもどろとなって言葉を完結させることのできない不器用さでかえって読者に好感を与えてしまうモディアノは、この記念講演をことのほか高いハードルであると感じたに相違ない。「始めはおずおずと、そして次第に堂々と原稿を読み上げた」と『ル・モンド』」の記事にあるとおり[4]、頭一つ抜け出したような長身ゆえ演台に置いた原稿の束との距離が不安を増すのか、会場の壮麗さに気後れをにじませながらもモディアノは、自らの文学への姿勢について、衒うことなく鮮明に聴衆に打ち明け、「歴代の受賞者のスピーチの際より長い」拍手喝采を受けたのであった[5]。

本論文では、この受賞講演を出発点としつつ、モディアノの文学の捉えがたい魅力、彼の方法について、改めて考えてみたい。先に触れたスウェーデン・アカデミーの発表した受賞理由については、真っ当と言う他ないが、ドイツ占領下のフランスというテーマの歴史的・政治的特殊性にモディアノの文学を押し込めることには、いささかの抵抗を覚えないでもない。筆者が「ささやかな、とるに足らない、およそ知的、文化的な論理には回収されないような微細な感

---

[3] « Pour son art de la mémoire avec lequel il a évoqué les destinées humaines les plus insaisissables et dévoilé le monde de l'Occupation ». http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/2014/

[4] 12/07/suivez-en-direct-le-discours-du-prix-nobel-de-patrick-modiano_4536151_3260.html

[5] モディアノのノーベル文学賞受賞記念講演は、インターネット上で視聴することができる。www.youtube.com/watch/?V=1NYsZMZG4Kこの映像には、モディアノが夫人とともに会場に入ってくる様子、スウェーデン・アカデミーの委員の挨拶、講演を終え、万雷の拍手の中、夫人の隣の椅子に戻るまでが収録されている。

覚」と感じてきたことについて、言語化の回路をもたらしてくれるように感じられたモディアノの講演の言葉[6]を抄訳するとともに、随時、モディアノの著作やインタビューを参照しつつ、歴史的・政治的特殊性の手前にある、あるいはそのベースにあるモディアノの「イメージ」にまつわる特有の姿勢について明らかにし、彼の文学の特質の一端を探り当てていきたい。

1．沈黙する作家、口ごもる作家

モディアノは、講演の冒頭で、人前で「話す」ことが自分にとっていかに困難なことであるかについて触れている。この発言は講演が不得意であることの弁解であると取れるが、決して弁解に留まるものではない。「話す」ことが不得手であるのは、作家という職業の習慣に結びついた必然であることをモディアノは明かすのである。

> 作家には沈黙する習慣があり、ある雰囲気の中に入り込んでいこうとすれば、群衆に溶け込まなくてはなりません。作家とは、そのような素振りは見せずに、交わされる言葉に耳を傾けるもので、群衆に介入していくとしたら、それはきまって、周囲の女性たちや男性たちをよりよく理解するために、おずおずといくつか問いを発するためなのです。作家は、原稿を削除・修正するのを習いとしているために、話し言葉はおずおずとしたものになります。もちろん、何度も修正した後、作家の文体は透徹したものとして立ち現われることもありえます。しかし、いざ人前で話すとなると、戸惑いを修正する術はもはやないのです。

「群衆に溶け込まなくてはならない」という言葉からは、「詩人とは群衆に湯浴みをすることのできる者である」と散文詩「群衆」の中で謳ったボードレールが彷彿とするだろう。ボードレールは群衆に湯浴みし、自在に他者になりかわり、様々な他者の生を生きる柔軟な想像力を持つ選ばれし者としての詩人の陶酔感に言及しているが、モディアノの言うところの「作家」は、もっと慎ましく謙虚であり、戸惑いとともにある存在である。ためらいがちにある雰囲気

---

[6] モディアノのノーベル文学賞記念講演録は、2014年12月７日付け電子版の『ル・モンド』*Le Monde* に掲載されている。本論におけるモディアノの受賞講演録の訳出は、電子版のフランス語テクストに拠った。
www.lemonde.fr./prix-nobel/article/2014/12/07/verbatim-le-discours-de-reception-du-prix

の中に入っていき、周囲の男女たちを理解しようと努め、遠慮がちに問いを発するのである。

モディアノの作品は、読者に人文主義的な教養を要求することは殆ど無い。例外は、処女作の『エトワール広場』*La Place de l'étoile*（1968）で、これはラファエル・シュレミロヴィッチという名を持つ作家志望のユダヤ人の青年のアイデンティティをめぐる揺れを、膨大な数の人名や書名と感嘆符をちりばめ、セリーヌ風の罵詈雑言に近い独白を多用しつつ描いた作品である。凱旋門の立つパリのエトワール広場Place de l'Etoileと、占領下のユダヤ人が付けなければならなかった黄色い星の徴、そのマークをつける位置 « place de l'étoile » の意味を二重にかけた題名を持つこの処女作において、自らの文学的教養と言葉の奔流を使い果たしたかのように、モディアノは次作からは、うってかわって抑制された寡黙なスタイルを持つようになり、ブッキッシュなモチーフが前面に出ることはなくなっていく[7]。ル・クレジオはあるインタビューの中で「モディアノとは、ゲームのように文学以外のことばかり話しています」と冗談めかして述べていたが、文学史的な遺産や人文主義的教養を著作の前面から消し去るのは、モディアノの意識化された方法なのかも知れない。語りの奔流よりも沈黙へ、饒舌よりも訥弁に、モディアノは自らの方法を求めているように思われる。切り詰められた言葉、シンプルで簡潔な行文、行間の沈黙がモディアノの特質であり、練り上げられた文体は芸術性とともにある種の大衆性も獲得している[8]。学生時代にフランス文学を志していたという毎日新聞社の鈴木陽一郎記者は「いわゆる「文学」とは、華麗な文体であったり、深遠な思想であったり、息をのむようなストーリー展開であったりするだろう。だが、モディアノ氏の文学は、そんな既成の「文学」とは一線を画している。これまでのノーベル賞を受賞した「文学」が持つ、いかめしさとは無縁なのだ」と評しているが[9]、平明でありながら、独特のトーンと浸透力を持つモディアノの文体は、根強く、

---

[7] 2013年に刊行されたモディアノの自選集（Patrick Modiano, *Romans,* Quarto, Gallimard）には、10作品が収められており、モディアノの序文によれば、それらは、収められていない作品の「脊椎」« l'épine dosale »となっているものであるというが、モディアノの作品の中でも文体的に異質な印象を与える『エトワール広場』はここに収められていない。また『エトワール広場』についてモディアノは、2003年のインタビューにおいて「pamphlet（政治文書、アジ文書）」である、と言及しており、モディアノの作品群の中でも異質な存在であることが伺われる。

[8] モディアノの新作が出れば、必ずフランスの書店では平積みにされ、ベストセラー入りを果たし、数年の後には文庫化される。モディアノの文庫本を置いていない書店というのは、少なくともフランスにおいてはまず見当たらない。

[9] 『毎日新聞』2014年10月29日付け朝刊「記者の目」のコラム。

幅広い読者を獲得したのである。彼自身、小説が読者と取り持つ関係につき、受賞講演の中で写真の現像という意外な比喩を用いて説明しているので、以下に訳出しておこう。

> 小説とその読者の間には、デジタル時代以前に行われていた写真の現像と同様の現象が起こります。暗室で現像する際、写真は徐々に見えてきます。小説を読み進めるにつれて、同様のプロセスが展開されるのです。しかし、作者と読者のあいだにある種の調和が成り立つには、小説家は読者に無理を強いる（forcer）―つまり歌手が声に無理を強いる（forcer）と言われるその意味で―ことなく、そうと気づかれないように読者を導き、読者に十分な余白を残し、本が読者に徐々に浸透していくのでなくてはなりません。それは、ねらいすました場所に針を射しさえすれば、神経システム全体に体液が拡がっていく鍼に似たわざによるのです。

沈黙し、口ごもる作家は、しかし、ここぞという一点は決して外すことのない職人的な確かさで、言葉を刻み込んでいくのである。鍼の比喩は、その言葉の技の的確さ、催眠的とも言われるモディアノの文学の魅力の源泉を見事に照射していると言えるのではなかろうか。

２．凡庸さの神秘と燐光

作家は書く前に、ある雰囲気の中に身を浸し、実在のものであれ、架空のものであれ、ある対象を見ようとする。モディアノの文学の中には、ストーリーテラーとしての冴えとともに、ストーリーの円滑な進行を時に遅らせ、時空のかなたに切り離されたイメージを滞留させる密かな手業が見られるように思われる。モディアノ作品においては、プルーストの作品におけるように記憶が記憶を呼び、隠喩が隠喩を呼び万華鏡のように華麗にイメージが広がりを見せるなどといったことはない。モディアノの小説におけるストーリーの円滑な進行に逆らうかのような、全体の構図に収まりきらない不可解なイメージは、それでもやはり切り詰められている。こうした切り詰められた細部の不可解な描写が、読者に中毒性をもたらし、再読、再々読を促しているのではないか。華麗な文体も、息をのむストーリー展開も、取り立てて奇抜な人物造形もあるわけでもないのに、いつのまにか読者がモディアノ作品の虜になるのは、作品全体の描写に立ち込めている謎めいた雰囲気と、悲痛な甘美さゆえではないだろう

か。こうしたモディアノの描写は、何に由来するのだろうか。受賞講演の以下の一節には、描写の前提となるイメージというものへのモディアノの接し方が表れているように思われる。

> 詩人・小説家は、日常生活に埋もれている存在や一見凡庸な事物に神秘 « mystère » を授けるのだと、そしてそれは、持続する注意力をもって、ほとんど夢幻的・催眠的な方法によってそれらを観察することによってなのだと、常に私は考えてきました。詩人や小説家の眼差しのもとで、ありふれた人生がついには神秘に包まれ、一見したところでは見えなかったけれども奥深くに隠されていた一種の燐光 « phosphorescence » を帯びるに至るのです。それぞれの人の奥底に存在しているそのような神秘や燐光を見えるものにするのが、詩人・作家、それに画家の役割なのです。

上記引用にフランス語の単語を付したが、« mystère » および « phorphorescence » という言葉は、モディアノの文学のエッセンスを指し示すものである。« mystère » は日本語では、「神秘」とも「謎」とも「秘密」とも訳すことができる。「神秘」と訳せば、宗教的なコノテーションも宿る。「謎」と訳せば、モディアノ作品にしばしば見られる推理小説的な結構に合致しよう。モディアノの愛読書でもあり、19世紀にベストセラーとなったウージェーヌ・シューの新聞小説*Mystère de Paris*（1842－1843）は、『パリの神秘』とも『パリの秘密』とも訳されうる。モディアノの作品には、カトリック的な「神秘」への傾斜やエソテリスム的傾向は無いが、巧みな推理によって解決されるような「謎」も出てこない。モディアノには「現代のプルースト」[10]という称号とともに「メグレ警部の出てこないシムノン」[11]という称号もある所以である。このように書けば、モディアノの言うmystèreのコノテーションが少しは理解されるだろうか。まさに、何をmystèreと感受するかは、人間観や世界観の問題であって、モディアノの言うmystèreを、数行の言葉で定義することはできない。ただ、このmystèreは、時の隔たりや、物理的な距離、物や人の消失によって、際立ってくる何かであり、モディアノ作品には、そうした設定が常に見られるということは指摘しておきたい。そしてまた、モディアノが自らを取り巻く世界をmystère

[10] スウェーデン・アカデミーのペーター・エングルンド常任事務局長の言。
[11] www.causeur.fr/modiano-prix-nobel-29666.html

として受け止める子供であったことも、作家としての方法論を規定したことをも指摘しておこう。受賞講演において、モディアノは次のように述べている。

> 私の個人的なことをお話しして、皆様を退屈させたくはないのですが、自分の幼少期のいくつかのエピソードは、後の私の著作の母型となったと思っております。私は、見知らぬ両親の友人の家に預けられ、大半を両親から離れて過ごし、場所も家も転々としました。当時、子供だった私にとっては何も驚くことはなく、奇妙な状況に置かれていても、全くあたり前のことのようでした。ずっと後になってから、自分の幼少期が謎めいたものに思われ、両親が私を預けた様々な人々や、絶えず移り変わっていったあれこれの場所についてもっと知りたいと思うようになりました。しかし、私を預かってくれた人々の大半について、素性を知ることはできませんでしたし、過去に住んだ家がどこにあったのか、その場所についてははっきりとはつかめずじまいでした。本当には明かすことも叶わず、謎を解き、神秘を見抜こうと努めたために、物を書く意欲が湧いてきたのです。あたかも、書くことと想像力が幼少期の謎や神秘を解く手助けをし得るかの如くなのです。

ドイツ占領下のパリで出会ったユダヤ系の事業家の父とアントワープ出身の女優の母親は、戦後に子供が生まれてからも共に仕事で多忙であり、長男パトリック（実名はジャン）と二つ違いの次男リュデイを他者の手に委ねた。パトリックが最初に預けられたのは、母方の祖父母宅であり、彼らはフラマン語しか話さなかったという[12]。父母から離れ、母国語からも引き離された日々。そして、怪しげな父母の友人・知人たちの家を転々とする日々。当時の自分にとっては当たり前の環境であったとモディアノは言うが、人並みの家庭の安逸という緩衝材もない故に、人も家も街も、むき出しの謎として立ち上がっていたというべきであろう。両親から離れて心細い日々を共にした弟のリュディも10歳にして白血病のため他界する。あてどなさと孤独のうちに過ごされたモディアノの自己形成期が、人にも物にも街にもmystèreを見出す作家としての視力をもたらしたといってもよいかもしれない。

モディアノの文学のもう一つのキーワードであるphosphorescenceについて

---

[12] *Patrick Modiano,* Les Cahiers de l'Herne, sous la direction de Laurence Tacou, 2012, p.273.

は、小学館ロベール仏和大辞典の記述を以下に引いておこう。ここには、もっぱら自然科学的な説明が見られる。

> ① リン光：リンの発する光。②【物理】りん光：光吸収の後、電子が励起状態から多重度を異にする基底状態へ遷移することにより生じる発光。③【生物学】（夜光虫などの）生物発光。

語源的に見るならば、フランス語phospohrescenceの元となる語「りん」phosphoreは「光」を意味するphosと「発する」の意味のphoreが組み合わさってできたラテン語phōsphorus（「朝の星」の意）に由来する。

自然科学上の説明と語源的な探索だけでは、この言葉のニュアンスを捉え切ることは難しいが、微妙さやゆらめき、ほのかな雰囲気の感じられる言葉であり、太陽の光の健康さや焼付くすような強度とは無縁であるということは指摘しておこう。

モディアノは、対象にmystèreを授けphosphorescenceを帯びさせる作家の方法を語るにあたって、一人の画家の例を引き、次のように述べている。

> 私は遠戚にあたる画家のアメデオ・モディリアーニのことを思います。彼のもっとも感動的な絵画は、街角の子供たちや女性たち、使用人や百姓、若き徒弟など、無名の人々をモデルとして描かれたものです。モディリアーニは、ボッティチェリやクワトロチェントのシエナ派の画家たちのトスカーナの偉大なる伝統を思わせる鋭いタッチで、こうした人々を描きました。こうしてモディリアーニは、慎ましい風貌の無名の人々のうちにある優美さや高貴さを、彼らに与えた―むしろそうしたものを明るみに出した―のでした。小説家の仕事は、そうした方向に向かうのでなくてはなりません。小説家の想像力とは、現実をデフォルメするというのとはほど遠く、現実の奥底に入り込んでいき、見かけの背後に隠されているものを探知するために、赤外線や紫外線の力でもって、その現実をありのままにあきらかにするのです。最良の場合、小説家は一種の見者であり幻視家であると思うと言っても過言ではありません。また、小説家はおよそ感じ取ることができないほどの振動を記録する地震計であるとさえ思います。

モディアノという苗字はイタリア・トリエステに設立されたポーカーなどのカードのメーカーの名と同じであり、ModianoとModiglianiは綴りも近い。家

系的な詳細は不明だが、モディアノがモディリアーニを親しい存在であると感じているのは事実のようだ。モディリアーニのタッチをボッティチェリやクワトロチェントの画家たちのそれに比する見方は、美術史的な見方からすれば意外なものであるが、モディアノは描線の鋭さという一点を持って、両者を結び合わせている。そして、ルネサンスの画家のように神話や宗教上のモチーフを描かずとも、モディリアーニはつつましい無名の人々を描くことを通して優美や高貴さを画布に留めたのだと、モディアノは見ている。モディリアーニの作品については、その細長い顔の輪郭や、虚ろに見開かれたアーモンド型の眼が特徴的であるとされることが多いが、むしろモディアノはモディリアーニのデフォルメ的な側面より、古典的なものにも通じる気品を本質的なものと見ているのだろう。

モディリアーニの画業に触れた後にモディアノは、「作家の仕事は現実をデフォルメするものではなく、現実を現実のままとらえることだ」と述べているが、この言葉は、モディアノの飾りの無いシンプルな文体の由来を物語ってもいよう。デフォルメせず、現実を現実のまま捉えるという小説作法を突き詰めたモディアノは、自伝小説『血統書』*Pedigree*（2005）において、「調書」のような文体を方法論的に選び取るに至っている。デフォルメの無さは、現実を現実のままに見る視力の強さ、意志の強さの帰結でもあろう。作家や詩人を一種の「見者」であり「幻視者」であると定義したフランス文学史上の例としては、ヴィクトル・ユゴーやランボーが思い浮かぶが、モディアノのこの発言には、作家としての秘められた情熱を再確認することができる。

3．「プルースト的記憶」とは違って

1965年、モディアノは２度目のバカロレア受験にパスして[13]ソルボンヌ大学文学部に登録するが、講義には殆ど出ず、小説の執筆に取りかかる。孤独だった青少年期のモディアノを救ったのは文学作品の数々だった。処女作『エトワール広場』には、モディアノの文学的経験が惜しみなく注ぎこまれている。モディアノの作品中もっともブッキッシュな要素の大きなこの作品において最も多く

[13] １回目の試験において、フランス語（国語）は19点、数学は白紙で提出したという。バカロレア試験は20点満点であり、19点というのはめったに見られない高得点である。モディアノは苦手の幾何学を母親の知り合いであったレイモン・クノーに個人教授してもらうことになるが、クノーはモディアノの文学的才能を見抜き、執筆を励まし、老舗出版社ガリマール社への橋渡し役となった。

言及されているのがプルーストの名であり、言及の回数は22回に及ぶという[14]。作家志望のユダヤ系の青年シュレミロヴィッチにモディアノは「僕は、ジェラール・ド・ネルヴァルにも、フランソワー・モーリヤックにも、マルセル・プルーストにさえなれないだろう」と書く。「マルセル・プルーストにさえ」という言辞は青年の侠気を表すものと見るべきだが、駆け出し作家としてモディアノがプルーストを強く意識し、プルーストのような方途を辿れないことをも痛感していたことは否定できないだろう。プルーストの後、何ができるか。それは、モディアノにとって切実な問いだったはずだ。記憶のテーマを導きの糸とする作風から「現代のプルースト」とも称されるモディアノであるが、受賞講演にはプルーストとは別の道を行くことについての時代的な理由が簡潔に述べられている。

> 残念ながら、今日、失われた時の探求は、もはやマルセル・プルーストの力や鮮明さをもってはなされえないと思われます。プルーストが描いたのは、いまだ安定していた19世紀の社会でした。プルーストの記憶は生き生きとした絵画の如くに、実に緻密に細部にわたって過去を甦らせます。現代における記憶は、プルーストの記憶と比べてはるかに不確かなものであり、記憶喪失や忘却に抗して闘わなければならぬ定めであるという印象を受けます。このすべてを覆う巨大な忘却の塊、その厚みのために、過去の断片や、逃れ去りほとんど捉えがたい人間の運命のとぎれとぎれの足跡しか捉えることができないのです。

受賞講演の中でモディアノは、バルザックやディケンズやトルストイを生んだ19世紀に郷愁を感じると述べ、「今より時間の流れが緩やかで、エネルギーと注意力をよりよく集中できるため、この時の流れの緩やかさが小説家の仕事に向いていた」と指摘している。プルーストは20世紀に入り『失われた時を求めて』の執筆にとりかかるが、プルーストの小説には、19世紀的なもの、ないしはベルエポックの社会の雰囲気が濃厚に漂っており、大戦による瓦解前の、ヨーロッパ社会が蓄積してきた文化的な成果が惜しげもなく投入されている。執筆の背景にある建築、美術、音楽などの芸術のディレッタントとしての経験の豊かさは特筆すべきものであるが、モディアノの小説には、そうした芸術愛好家

[14] 前掲書、野崎歓「星から届く光」『ふらんす』、13頁。

の好餌となりそうな要素は殆ど見られない。かわりに固有名を持った街路や駅、カフェやホテルといった都会の日常の場所が執拗に描かれている。

プルーストにとって、芸術は個人の実存に働きかけるものであるとともに、確かな歴史を伴っている。ヨーロッパの芸術的遺産を存分に汲んだプルーストの実存的記憶は、しばしば音楽や絵画、建築の芸術的要素や比喩を伴い、壮麗な伽藍を立ち上げる。モディアノは貧しく切り詰められているような、ごく日常的な生活の場所から、切れ切れの記憶の断片、その揺曳を追っていく。若き日にプルーストを意識したモディアノは、なぜこのような語り口に行き着いたのだろうか。2003年の『夜の事故』*L'Accident nocturne*の刊行に伴い行われた読書雑誌*Lire*のインタビューにおいて、モディアノは以下のように述べている。

> リアルタイムで物事を物語ることができるのは、非常にまれなことです。なぜなら常に、一歩退く必要があるからです。流れた時間を感じ取ること。私にとって書く動機付けとなっているのは、痕跡を見出すことです。直接的に事物を物語るのではなく、こうした事物が少し謎めいたものであるように語るのです。事物自体というより、事物の痕跡を見出すのです。それは物事に正面からアプローチするのよりもはるかに示唆的なのです。手足の欠けた彫像のように…人は、それを再構成しようとする傾向があります。示唆するほうが射程が大きいのです[15]。

記憶を語ることに重要性を見出している点でモディアノはプルーストと変わりはないが、記憶を伽藍のように提示するのではなく、断片や痕跡を示し、あとは読者に委ねるという方法を取る。全てを描きださないことで、かえってひろがりを感じさせる。それがモディアノの方法であるスウェーデン・アカデミーが評価したのも、この逆説的な「記憶の芸術」であったと考えられる。

4．記憶と街

モディアノの作品において、人物像がしばしば曖昧模糊としているのに対し、場所については、実在の細かな通りの名前、時には番地までが克明に記される。モディアノ作品を読むのに辞書は持たなくとも、地図は携えておいた方が良いなどと言われる所以である。国内外に作品が認められ、各国語に自作が翻訳さ

[15] *Lire*, 2003年10月１日付け、ロランス・リバンLaurence Libanのインタビューに対する応答。

れるに至っても、パリをはじめ、都市に実在する通りの名、土地の名を召喚しつつ物語っていく方法にブレはない。登場人物は架空であり、時に夢幻的でさえあっても、場所はきわめてリアルな設定となっているのである。モディアノ作品は、あくまでパリを中心とした優れてローカルなものに根ざしている。モディアノのノーベル賞受賞が驚きをもって受け止められたのも、モディアノの文学があくまでローカルなリアリティに根ざしており、文化の越境や異文化との相克や「世界文学」といった、いかにもノーベル賞に似つかわしく思われる要素が前面に出ることはないからであろう。固有名を持った街路を作品の重要な要素とするモディアノにとって、街路とは、街とは何なのか、それについて語った受賞講演の一節を以下に訳出しよう。

> そこに生まれ、そこに暮らした者にとっては、年月が過ぎるにつれ、ある街の各々の界隈、各々の通りが、思い出や出会い、悲しみ、幸福の時を呼び覚ます。往々にして、同じ一つの街路が継起する記憶に結びついているのです。ですから、ひとつの街の地政図によって、継起的な層を貫いてあなたの人生が記憶に甦ってくるのです。それはあたかも羊皮紙に重ねられた文字が解読できるかのごとくです。そして、ラッシュ時に通りや廊下ですれ違う無数の見知らぬ他者の生もまた解読できるかのようです。

モディアノにとって街路は、ただ場所として存在するものではなく、記憶を召喚する装置なのである。モディアノが生を享けたのが、パリという歴史の重みがあり、過去の痕跡が幾重にも刻み込まれていると共に、変化にも曝れている街であったことも、モディアノの方法を方向付けることにつながったであろう。また、大都市特有の匿名性のもたらす悲痛さと甘美さに、モディアノが殊のほか敏感であることも、作品の基調を規定しているであろう。受賞講演の中でモディアノは、ロンドンの街での女性との偶然の出会いと、わずかの距離（eighteen meters）で隔てられ、再会のかなわなかったせつなさを綴ったトマス・ド・クインシーのテクストを引用している。男女の出会いと別離は、街における最もありふれたドラマであり、またその他の多様な関係性の母型となっていると言えないだろうか。

距離や隔たりがある状況において、相手を思慕すること。登場人物の設定は様々であれ、モディアノ作品においては、恋愛感情に限定されない、様々な思慕が描かれている。生死の境によって隔てられている場合、思慕は哀悼の思い

として表れることになる。モディアノはリルケの『マルテの手記』のモーリス・ベッツによるスイユ社のフランス語翻訳に序文を寄せているが、リルケは「若い詩人への手紙」において、恋愛について書くな、というアドバイスをしていたことが思い出される。恋愛という思慕の最も典型的な感情に囚われてしまうことで、表現のスペクトラムが狭まることを懸念してのことだった。モディアノはリアルな街路を物語の基盤に据えて、様々な関係性のバリエーションに眼差しを投げかけている。モディアノの作品の中では、街路が存在感を持つ一方、人物のアイデンティティは希薄に、捉えがたいものとして点描される。大都市は、そうしたコントラストがリアリティを持つ特権的な場所なのである。

4．モディアノ作品の極北・*Dora Bruder*（1997）の方法

モディアノは受賞講演において、文学の主題としての都市というテーマに触れ、次のように語っている。

> 大都市では、紛れ、消えてしまうこともありえます。身分さえ変え、新たな人生を生きることもありえます。最初に町外れの一つ二つの住所だけを出発点として、誰かの足跡を見出そうと、実に息長い探求に励むこともできます。

「誰かの足跡を見出そうとすること」―これは、確かにモディアノの多くの作品の中に見られるモチーフである。そして、このモチーフをつきつめ、フィクションからノンフィクションへとはみ出していった[16]作品が、東欧出身の移民を父母に持ち、パリの街からユダヤ人絶滅収容所へと送られ、1943年に亡くなった実在の少女の足跡を追った*Dora Bruder*[17]である。この作品の中で、モディアノは次のように語っている。

> 彼ら（筆者注・ドラ・ブリューデールとその両親）はこの世に生きた証拠などろくに残していない人たちだ。ほとんど無名と言ってよい。私は彼らが住んでいた場所を偶然見つけたが、そうした場所、つまりパリのいくつかの通りや、二、三の郊外の風景から切り離して浮かびあがらせることが

[16] モディアノは、ドラ・ブリューデールに想を得て、若いユダヤ人の娘を主人公とした小説『新婚旅行』 *Voyage de noces*を1990年に上梓している。
[17] Patrick Modiano, *Dora Bruder*, Gallimard, 初出1997. 邦題は『1941年。パリの尋ね人』。

できない人たちだ。多くの場合、彼らについてわかることといえば、せいぜい住所くらいだ。だが地理的には正確にわかっても、それと対照的に、彼らの生活は永遠に分からずじまいだろう―この空白、未知と沈黙のこの厚い壁[18]。

モディアノは、占領下パリの資料に当たる中で、1941年大晦日付けの「パリ・ソワール」紙の尋ね人広告中にドラ・ブリューデールの名を目にする。彼女の両親の住所が、かつて自分がよく出入りした映画館のあった場所であったという些細な符合から、モディアノは、この無名の少女の足跡を追う息長い探索を始める。８年もの調査を重ねて、切れ切れの事実を拠り合わせ、彼女にまつわる場所にくまなく足を運び、ドラと同じく家出を繰り返した自らの青年期や消息を絶った父親の姿を重ね合わせつつ、ドラの生を再構成しようとする。その過程を描いたのが本作品である。何十年も前に亡くなった無名の少女のことゆえ、得られる事実はわずかなものでしかない。モディアノの前には謎と空虚が立ちはだかる。しかし、そのもどかしさから、探索は熾火のように静かに熱を帯び、執拗に続いていく。長きにわたる探索のきっかけについては、以下のように語られている。

1988年12月に、1941年12月の「パリ・ソワール」紙に掲載されていた尋ね人ドラ・ブリュデールの広告を読んでから、この記事のことを何ヶ月も何ヶ月も考えつづけた。いくつかの細部の正確さが心につきまとって離れなかった。「オルナノ大通り41番地、１メートル55センチ、うりざね顔、目の色マロングレー、グレーのスポーツコート、ワインレッドのセーター、ネイヴィーブルーのスカートと帽子、マロンのスポーツシューズ」だがこの細部の周囲は闇であり、未知であり、忘却であり、無の世界であった[19]。

尋ね人の広告に掲載された、少女の身体や服装についての即物的な記述。記述の示す細部と周囲の闇。ここに作家の想像力が発動する。即物的な細部が作家に呼びかける。観念連合や布置連関を生むこともなく、ただ突き刺さるような事実そのものであることによって、尋ね人広告の文言は、モディアノを捉え

---

[18] パトリック・モディアノ著、白井成雄訳『1941年。パリの尋ね人』作品社、1998年、65頁。Patrick Modiano, *Dora Bruder*, Paris, Gallimard, folio, 1999, p.53.
[19] 同書、65頁。*Ibid.*,p.53.

てしまったのである。ロラン・バルトは写真について語った文章の中で、一般的、科学的関心に根ざし、文化的にコード化された写真受容を指す概念「ストゥディウム」の対立概念として、一般的な概念をゆさぶり、そうした概念を破壊しにやってくるコード化不可能な細部を発見してしまうような経験につながる「プンクトゥム」という概念を提示しているが[20]、この尋ね人広告の文言も、いわばプンクトゥムとしてモディアノに感受されたというべきだろう。探索を進める中でモディアノは、ドラやその両親の写真を手に入れ、写真についてのいわばエクフラシスともいえる記述を試みているが、それは、やはり即物的でしかありえないものに、ある尊厳を見つめていこうとする手法なのである[21]。

モディアノは、少女の死から数十年も経って、なぜこの少女の足跡を追っているのか。それは単なる憐憫によるとも、歴史家的な知的欲求によるとも言えない。なぜ追っているのか、その理由をモディアノ自身、過不足のない言葉で説明することなどできないだろう。そして、そのようなことを歴史や政治や文化の布置連関に照応するような仕方で説明すべきでもないのだろう。ただ、不可視の中心のまわりを不器用に彷徨いながら、モディアノはノンフィクションという形で書き付けずにはいられなかったということではなかったか。モディアノは、無名の少女の足跡を８年かけて追い、フィクションからノンフィクションへと踏み出し文章を書いていく中で、どうやら、書くことの―文学の―最も根本的な意義について、一つの結論に至ったものと思われる。白井成雄の翻訳による日本語版に寄せられたモディアノの序文には以下のように書かれている。

> ある批評を読んでいて、私は次の文章にとくに心打たれました。「もはや名前もわからなくなった人々を死者の世界に探しに行くこと、文学とはこれにつきるのかもしれない。」[22]

無名の人々を死者の世界に探しに行くこと。応答するはずもない他者を見つめ続ける注意力は、絶対的に非対称な何か、愛か祈りに似た何かに接近してい

---

[20] Roland Barthes,《Chambre Claire》, *Oeuvres complètes* Tome. 3, Seuil, 1995.

[21] 本作品における写真の描写的記述の特質とその文学的機能について詳述した論文にValeria Sperti《L'Ekphrasis photographique dans Dora Bruder de Patrick Modiano : entre magnétisme et refraction》, *Cahiers de Naratologie*, 2012, pp.2-13およびSCHULTE NORDHOLT, Annelies, 2012, « Photographie et image en prose dans *Dora Bruder* de Patrick Modiano », Neophilologus, n° 96, vol. 4, p.523-540. がある。

[22] 前掲書、パトリック・モディアノ著、白井成雄訳『1941年。パリの尋ね人』作品社、1998年、３頁。

くように思われる。無名の死者へと思いを致すモディアノの、時空を超え、死者と体感を通わせているかのような行文を以下に示そう。

> 夜のとばりが早く降りるが、そのほうが都合がよい。雨降りの日の陰鬱な単調さを、夜が消し去ってくれるからだ。雨の日は、今本当に昼間なのだろうか、どんよりと暗い日食のような、昼とも夜ともつかない空模様が夕方までつづくのではなかろうか、と思えてくる。やがて、街燈やショーウインドーやカフェに明かりが点る。夕暮れの空気は肌を刺し、ものの輪郭がくっきりと浮き上がってくる。交差点は渋滞し、人々は急ぎ足で街をゆく。こうした多様な光と雑踏に囲まれていると、ドラとその両親がいた都会、今の私より二十歳若いときに父がいた同じ都会に私がいるのだとは、とても信じられない。あの時代のパリと今日のパリをつなぎ、当時の細々とした出来事をあれこれ思い出そうとするのは私一人ではないかと思えてしまう。時にこのひもは細くなり、切れそうになる。昨日のパリが今日のパリに隠れ、ちらりとしかほのみえなくなるような夜もある[23]。

無名の死者を感じ取ること。それは、もはや知力や好奇心といったものではない。時を超え、己れを消し、他者の内省感覚的なものにまで入り込むこと、浸透していくことだ。前節で、プルーストとモディアノの文学の差異について触れたが、むしろ対象への浸透力という意味では等価なものがあるようにも感じられる。いかにもモディアノの文体は簡潔であり軽やかに見えるが、凝視と集中力あってこその浸透力を備えていると言えるのではないか。ノンフィクションという結構故だろうか、『ドラ・ブリューデール』には、モディアノの方法論と言えるものが、この作家には珍しく正面切って書き込まれている。

> 過去の多くの作家同様、私は偶然の一致を信じるし、また時には、作家に透視能力の天分があるとも信じている。もっとも「天分」という語は、一種の優越性を示唆するから正しくはないであろう。そうではなく、要するにこれが仕事の一部だということなのだ。つまりものを書く際には想像力を発揮しなければならず、物事の道筋を見失い、怠惰に流れることのないように細部にまで精神を集中する（まるで何かにとりつかれたかのように）

[23] 同書、62頁。Patrick Modiano, *Dora Bruder*, Paris, Gallimard,folio, 1999, pp.50-51.

必要がある。この緊張そのものが、この脳の体操が、ついには『ラルース辞典』の「透視能力」の項目に記されているように、「過去あるいは未来の出来事に関する」瞬間的な直感を生み出すのであろう[24]。

作家に要求されるものについて語った、戦慄すべき一節であるという他ない。作家とは見者であり、幻視者である、と受賞講演で語ったモディアノは、精神の極度の集中を必要とする執筆の営為の中で、実際に、何か―それは、人や街の命運のようなものと言って構わないだろう―が見えてくる瞬間を幾度も経験したに違いないのである。

おわりに

本稿は、モディアノがノーベル賞を受賞した驚きに端を発するものであるが、こうして、改めて仔細にモディアノの方法について検討してみると、自らの必然に導かれ、独自の方法を徹底させる作家としての真摯な姿勢が浮かび上がってくる。平明でありながら彫琢されたモディアノの行文の魅力、また、その行文が生み出された背景について少しでも読者に伝わったなら、本稿の役割は果たせたと言ってよい。

街の醸し出す記憶に導かれ無名の人々に思いを馳せ、幾多の物語りを紡いできたモディアノの顔には、凝視し想起することを日々の営為として積み重ねてきた人間としての複雑な陰翳が刻まれているように思う。ノーベル賞受賞という華やかな舞台においても、モディアノは含羞とためらいを秘めていた。若い頃は、お金に困り、作家のサインを真似て古本に書き込み高値で売ることまでした、とモディアノは述懐しているが、受賞講演や授与式のモディアノの映像からは、この上なく誠実に生きてきた人間の相貌を見る思いだった。善悪や正邪の定かならぬ人間の曖昧なる領域を凝視しつづけた作家にやどる真摯さの印象は、ことのほか感銘深かった。

最後に、小説家の使命について触れたモディアノの受賞講演の結びの言葉を記しておこう。

…小説家の使命は、この忘却の巨大な白紙を前にして、沈んでいた氷山が海原の面に現われてくるかのように、消えかかったいくつかの言葉を浮か

[24] 同書、64頁。*Ibid.*, pp.52-53.

び上がらせることなのです。